

## 令和3年度 第1回教育課程研修会 報告書

1. 目的 高等学校新学習指導要領への適正かつスムーズな移行を図るため、観点別学習状況の評価について理解を深め、留意点と事例を学ぶ。
2. 日時 令和3年6月21日(月) 午後1時20分～
3. 会場 静岡県私学会館 5階大会議室 (一部オンライン参加)
4. 対象者 52名 (教務部長、教務主任等教務分掌の責任者及びこれに準じる教務担当教諭等)
5. 日程

13:20～ 開会式

部会長挨拶 静岡学園中学校・高等学校

校長 鈴木 啓之 先生

13:30～ 講演「新学習指導要領における観点別評価とその事例」

講師 静岡大学教育学部 副学部長 教授 村山 功 先生

15:00～ 連絡事項

閉会

### 6. 内容

#### (1)部会長挨拶

- ・研修会実施の経緯と講師紹介

#### (2)講演

##### ①評価と目標

- ・評価は指導があつての評価である。指導と評価は一体である。
- ・目標があるから評価できる。評価があるから指導できる。指導するから評価し直す。目標・指導・評価は一体である。

##### ②評価の基本的な問題：「何を」「どのように」評価するか

- ・「何を」評価するかは目標によって決まる。
- ・「どのように」は「何を」が決まってから。
- ・評価の前に、目標を理解しているかどうか問題。
- ・評価したいものを可視化する、「曖昧な可視化+厳密な点数化」は本末転倒。

##### ③学習指導要領

#### 1. 資質・能力の3つの柱

- ・「習っていないからできない」を「できる」に変える力を身につけさせる。
- ・「習ったこと」を使って、どの程度習っていないから「できない」から「できる」に変えるか。
- ・「生きて働く」知識・技能、「未知の状況にも対応できる」思考力・判断力・表現力、「学びを人生や社会に生かそうとする」学びに向かう力・人間性等。

#### 2. 主体的・対話的で深い学び

- ・授業時間のすべてを実現するのではなく、単元や題材のまとまりで実現する。
- ・「活動あつて学びなし」のアクティブ・ラーニングをするのではない。

- ・他者の考えに触れることで、自分の考えの狭さ、浅さを克服する、つまり考えを深くする、広くする。対話の相手は、子ども同士でなくても先生や本でも良い。

### 3. 主体的に学習に取り組む態度

- ・自ら学習を調整せず、ただ粘り強いただけの学習は評価されない。
- ・学習を調整していれば、結果的に粘り強く学習することになる。

#### ④評価に関連する資料（1）

- ・令和元年6月、『学習評価の在り方ハンドブック：高等学校編』が国立教育政策研究所から出されており、教師の指導改善と児童生徒の学習改善につながる学習評価が求められている。また、学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ることが示されている。
- ・学習指導要領に示す目標に照らして、その実現の状況を見るので、全員がAになったり、全員がCになったりすることもあり得る。
- ・ところが、中学校学習指導要領では知識・技能や思考力・判断力・表現力の目標は個別に示されているが、学びに向かう力の目標は、個別に示されていない。したがって、全体の目標を当てはめるか、思考力・判断力・表現力の目標を「しようとしている」に書き換えるかで設定する。

#### ⑤評価に関連する資料（2）

- ・令和2年3月、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料：小学校編・中学校編、教科別』が国立教育政策研究所から出されたが、高校編は出されていない。
- ・上記の内容に従えば、評価規準を書くことはできる。
- ・児童生徒は、知識習得、思考力・判断力・表現力等の育成のため、学びに向かう。その中で発揮される主体的に学習に取り組む態度であるが、うまく学べていない児童生徒に対しては、個別に学習内容の指導を行うのではなく「学び方」の指導を行うことが示されている。
- ・評価の対象は、知識の習得や思考力の育成であり、自己調整そのものは評価しない。
- ・具体的な自己調整を目標として示すことは不要。学習の進め方には一人一人特性があるので、一律には指導できないからである。
- ・3観点は長期的にはA、A、AやC、C、Cになっていくものだと考えられるが、学び方自体が大事な評価対象であると知らせることが大事なことである。
- ・『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料：小学校編・中学校編、教科別』後半部分には、評価規準の具体的な事例がある。
- ・途中経過の評価はあくまでも途中経過であり、最後の評価が評定に繋がる。

#### ⑥結論：評価より指導を

- ・評価は、教師の指導改善と児童生徒の学習改善につながることで、という目的に合った制度で十分で、評価を厳密に実施するのは困難である。
- ・「適切に評価しているが、指導は不十分」よりも「適切に指導しているが、評価は不十分」のほうが好ましい。指導をしっかりしてほしい。